



大学同研究室なつかし対談

南 和行弁護士×坂井崇俊編集長 (ろくでなし子事件弁護団) (AFEE編集長)

— 本日は、大学の研究室で共に並んで研究をされた南和行弁護士と坂井崇俊編集長に大学時代のこと、その後、表現の自由を巡る活動に触れるきっかけ、現在についてなどお話し頂きたいと思えます。

— それでは、よろしくお願い致します。

二人の出会い

南和行弁護士 (以下、南)…坂井くんはいつから関西にきたんだっけ？ 確か、高校までは東京だったよね。

坂井崇俊編集長 (以下、坂)…そうですね。高校までは東京で、大学から京都に行きました。

南…ですよ。いつから、京都に来たんだろうかなど。で、同級生ではなくて2才違い。坂井さんは4年生の時に卒業して、第一勧銀に勤めたんですよ。僕は、その時、大学院の2年生で、その時、もう研究室には3年いたんですけどね。

坂…良く覚えてますね。

南…なんとなく理系ってだからだと大学院に進む人が多くて、僕も、だからだとモラトリアムでいいじゃないと思う方だから、僕も、何かこだわりがあったって大学院に進んだわけではないので。理系に行ったら6年間モラトリアム出来るみたいな感じ

プロフィール

弁護士 南和行 (みなみ・かずゆき)

1976年生まれ。

大阪府立天王寺高校、京都大学農学部、京都大学農学研究所 (博士号)、大阪市立大学法科大学院。2009年弁護士登録。2013年同性パートナーで同じく弁護士の吉田昌史となもり法律事務所を開設。

で大学院に行ったんですよ。この人、4年で出て行くなんて、偉いなど思ったのと、東京の人だし、第一勧銀に行くなんて、エリートっぽいなど思ってた、そういう意味で、坂井さんは記憶の中ではそういう人もいたなと覚えている一人だったんです。

1年ほど前、Facebookか何かで、南さん、ろくでなし子の弁護団なんですかと聞かれて、仕事柄、そういうことはよく言われるんですが、なんで、坂井くんなん？って思ってた。そうしたら、山田太郎さんの秘書をやっていると知ってて…

坂…その当時、山田太郎って知っていました？

南…政治好きな割には知りませんでした (笑)

坂…うぐいすりぽんの荻野さんと話している時に、南さんがろくでなし子さんの弁護団に入ったことを知ったんですよ。それで、メッセージを送ったんですよ。南さんに。

南：で、議員秘書はどうでした？ 僕もいろいろな議員秘書の人は知っているには知っているんですよ。議員秘書って、ちゃんとしている議員さんのところと、ちゃんとしていない議員さんのところで全然違うじゃないですか。

坂：うちは、ちゃんとしているかは分からないですが、24時間ずつとお付きでということではなく、政策メインでの仕事ができたので、面白かったですね。

南：実はね。僕も政策秘書の資格を持っているんですよ。司法試験通つてすぐに、面接を受けて、公設秘書の資格だけは取ったんですよ。つぶしが効くようにって思ったんですが、今思えば、つぶせるのかどうかって（笑）

坂：（笑）

二人の思い出話

坂：僕は南さんの思い出といえば、研究しながら、プリンセスプリンセスをずっと聞いているイメージがありました。

南：よくぞ、振ってくれました。僕の血液はプリプリでできています。今日もプリプリを聞きながら新大阪駅まで出てきたんですよ。はじめて一人で東京に来たのもプリプリのコンサートで、ここ赤坂といえば、プリプリのアイドル時代のグルー

プ名の「赤坂小町」だしさあ。東京の思い出は、なにかとプリプリ！ 青山の小さなライブバーに岸谷香さん（結婚前の本名は奥居香・プリンセスプリンセスのボーカル）のアカースティックライブで来たし、この前の豊洲にもプリプリの再々結成でも来たし。元気がないときなんかはiPhoneのプリプリの全120曲のプレイリストをシャッフル再生してイントロクイズを一人でしてね。いつも全問正解なんだけど、プリプリのイントロクイズ大会があったら絶対上位入賞だよ……と自分に自信をつけて元気を出すとか。

坂：研究室の時もそんなことしてたんですよ。

南：やってた、やってた。博士課程の○○さんっていたでしょ。その人が、Windowsで動くMP3プレイヤーとかを自作で作ってくれて、それで、イントロやってみましたよ。増田先生も仲村先生もITみたいな好きでしたよね。もう増田先生は亡くなられてしまいましたけど。実は増田先生は僕がロースクールに入ったときにすごく喜んでくれて。普通、自分の研究室の修士課程まで出た人が、木材の研究をして、木材の会社に勤めて、辞めて司法試験の勉強なんかしたらアホかと思うんだけど、そこで、頑張つてと言ってくれて、ロースクールに受かったこともすごく喜んでくれて、亡くなったことは本当に残念。坂井さんはいつ銀行辞めたの。

坂：僕は2年いなかったですね。1年11ヶ月で辞めました。その後、色々なコンサルティング会社に行つて、そのうちの 하나가、山田さんの会社で。僕も政治の世界に入るとは思ってもいなかったんですけど、なかなか公設秘書なんてなれるもんで無いと思つて、とりあえず一回やってみるかという感じで、結構軽いノリで。

南：会社辞めるつて言う不安はなかったんですか。

坂：僕はそのころは、フリーランスのコンサルをやっていたんですよ。だから、クビになったとしても、元に戻れば食べてはいけると思つていて。実は秘書時代の給料つてだいぶ下がったんですよ。でも、戻ればなんとでもなるから、いっか、みたいな感じですよ。

南：それは東京だからかなあ。大阪って本当に景気が悪いなつていう実感があるんですよ。フリーランスで仕事をするとか、芸術とか、アートとか自分のしたいことと社会と調和していくのって、なかなかお金にならないつて感じるんですよ。でも、東京にくると、例えば、ギャラリーで展示会をしてたら、それなりに人が集まっている気がするんですよ。ということは、それで一つの、経済的な活動になるじゃないですか。そういうことができるのが東京なんだろうなつて思つてます。

坂：南さんも大阪で弁護士として活躍されている

じゃないですか。でも、確かに東京の方がそういうビジネスをやりやすい環境にあるでしょうね。実際、コンサルの仕事でも大阪の会社の案件は東京から行ってましたからね。ずっと大阪ですもんね、南さんは。

南.. そう。でも、京大に入ったときは、せっかく京大来たし、東京だ、ニューヨークだという変な野望はあったんですけど、結局、就職したのは岸和田の会社で（笑）司法試験の勉強も大阪だったし、ツレも大阪の人だったので、まさか、大阪で弁護士をするとは思わなくて。今の顧客もほとんどが、小学校の同級生とか、親の友達とか。自分がこんなちっちゃな枠で収まる人間とは思っていませんでした（笑）

「僕のおちんちんが」

坂.. 南さんの本（僕たちのカラフルな毎日〜弁護士夫妻の波瀾万丈奮闘記〜）にはありましたが、ロースクールに通ったきっかけなどは？

南.. すいません、脱線して。実は、もともと父親が弁護士だったんですよ。さつき、モラトリアムのお話をしましたけど、何も仕事しなくても、いざとなれば、司法試験の勉強をするって言ったなら、親が限りなく援助してくれるのではないかと（笑）でも、大学4年生の時に父が死んでしまっって、そ

の時は、そんなはずじゃなかったのに、いつまでもモラトリアムさせてもらえるんじゃないかな。それで就職したんです。でも、僕の心の中では弁護士業界は近かったですよね。

南.. 社会人になる直前に出会ったのが今の彼氏なんですけれども、その後その彼氏にいろいろあったんです。彼が、司法試験だったら勉強するとうことだったんで、会社勤めも全然嫌ではなかったんですが、僕も司法試験を頑張ることにしました。彼と二人で生きていけるならその方がいいと、すごく良いと思ったので。当時、僕は同性愛を隠していたので、一生このまま隠して二重生活みたいなのはやだな。会社では自身の遊び人みたいなイメージで思われて、本当は彼氏いるのに、それは言えないなと…。それで、二人で弁護士になつたら、表だって言えなくても、二人で人生を共有できるみたいな思いがすごくあって、司法試験の勉強をはじめて、ロースクールに通ったのがきっかけなんですよね。

坂.. 大学の時にカミングアウトしてなかったですよ。

南.. そう、してなくて。分かってないよね。誰もね。坂.. 僕は全然知らなかったです。

南.. ちなみに、坂井くんは今みたいに太って無かったし、可愛かったですよ。この学年ではかっこいい子少なかったんで。でも、仲良くはなりた



いと思っていたけど、なんとなく関西的なノリもないし、近づき難いと思ってたんですよ。好きだなとは思っていたけど。で、よく、大学の中で飲んでたじゃないですが。僕が夜、モノを取りに大学に来たら、酔っ払ってる坂井くんがトイレからふらふら出てきて、「南さん、僕のおちんちんが」みたいなことをうわごとのように言いながら、通り過ぎて行って。僕も脳裏にすごく焼き付いていて、「おちんちんって、坂井くんが言っ

た！ー！」って。坂井くんは性的なことを言われた、ドキドキと思つて。それから、坂井くんのことを強く意識してドキマギした覚えがあるんですけど。

坂井：いやー、覚えて無いです（笑）

南：坂井くんが表現の自由の活動をやってっていると知って、うちの彼氏に、研究室の後輩なんだけど、夜、酔っ払って、「僕のおちんちんがー」みたいなことを言った子なんだよみたいなことを言つて（笑）

でも、同性愛であることを言つたら、孤立してしまうんじゃないかという思いと、あと、多くの同性愛の人がもしかしたら抱えているかも知れないけれども、言つてはダメみたいな環境の中で中高大、社会人と暮らしてきたわけじゃないですか。そしたら、周りに築いている人間関係は同性愛者じゃない南さんとお友達の間人間関係だから、それを言うことで、嘘をついてたんじゃないかと言われる思いがあったりとか、隠し事があったこととで、今までの人間関係が変わってしまうんじゃないかという緊張感はなんとなくあると思うんです。

坂井：今と比べると20年前ってまだカミングアウトする環境って整って無かつたですもんね。

南：同性愛と言つても、概念的なものとは分らないからなくて、自分が男の人を好きだという以上のことは

知らないわけじゃないですか。長らく、レズビアンの人に会つたこともなかつたし、トランスジェンダーの人も弁護士になるまで、状況を理解していなかつたです。僕がゲイということを知っている友人でも、カミングアウトする前の友人に会うのは今でも緊張するんですよ。そういう意味で、FacebookとかTwitterとかはいいなーと思います。

坂井：今日も実際に会つたのは20年ぶりぐらいのはずなんですけれども、さっき、この椅子に座る前から話したくて、話したくて仕方ないという南さんを見て、変わつてないなと思ひましたよ。大学の時もよく話すのが、大阪のおばちゃんっぽいって言われてましたもんね。

南：そう、大阪のおばちゃんっぽいところはあるけれども、でもゲイだから女っぽい、イコールおばちゃんっぽいってことではなくて、しゃべり、メンタリテイの問題ということ。彼によく言われるのは、俺は大阪のガミガミ言うおっさんになっていって、お前はどんどん、どんくさい大阪のおばはんになっていくと言われてる（笑）

フェミニズムへの違和感

南：ろくでなし子事件¹を通じて、山口貴士弁護士のことや、山田太郎さんを知つて。それまで、

表現の自由は教科書的に「政治的意見表明を阻害されない」といったようなイメージしかなかったんですよ。ろくでなし子事件に係わつてから、表現の自由の危機とか、表現の自由についての重要性をすごい感じるようになったんです。

ろくでなし子さんの事件に係わるようになったきっかけは、もともと北原みのりさんがやってたポータルサイトで女性向けのコラムの執筆をしてたんですよ。そこでは、ゲイの弁護士が明け透けに性やセックスについてあるいは、男の人が男の人を性的対象として見るとか価値踏みするとか、男が男にする版のフェミニズムみたいなトーンのエッセイを書いていて。テイストはタダのエロではあるんですけどね。電車に乗っていたらカッコいい男の子がいて、エロいことを妄想しましたみたいな。それはそれで僕も楽しく書かせてもらっていました。

僕が連載させてもらっていたポータルサイトの中で、僕もろくでなし子さんの存在は知っていたんですよ。はじめて作品をネットで見たときに面白くて、僕は女性器に対して性的な関心を持たないので、手を使うのと同じように体のパーツを使った作品として見ました。作品を見たら、ろくでなし子さんがゲラゲラ笑いながらこれを削っているんだらうなという楽しそうな姿が想像ついてそれがとても面白いなと思ひました。政



治的メッセージというほどの高まりではないけれども、ちよつとからかっているようなところが面白くて、作品とそれを作っているなし子さんのことが大好きになりました。そんな時期に、ニュースのヘッドラインで女性器アートをしている自称芸術家逮捕という記事を見て、「世の中にはろくでなし子さんみたいな人がほかにもいるんだあ」と思つて、クリックしたらろくでなし子さんで、えーって思つたんですよ。

その時、ろくでなし子さんに対するサポート大丈夫かなあと思つて、北原さんのポータルサイトで連載を書いておられた女性の弁護士にも連絡を取るなどしたのですが、どうなってるかよく分か

らなくて。ただ僕は大阪ですから、「ろくでなし子さんの逮捕に、状況が心配だ」みたいなことをFacebookで書いたら、大阪の大先輩の弁護士の壇俊光さんが「そう思うなら会いに行け！ 弁護士だろ！ 会いに行け！」とむっちゃプレッシャーかけられて（笑）、それで新幹線に飛び乗って会いに行ったのがお台場の湾岸警察署でした。

ろくでなし子さんの事件について、僕もはじめは表現の自由と言うよりも、女性の権利とか、フェミニズムみたいな印象で臨んでいました。「女が自由に表現すると弾圧される！ 男社会はアカン！」みたいな。女性が女性のことを主張したら見せしめにされる、何か見せしめにするのが一番都合がいいのは自分を語る女なんだというような。その時点では山口貴士先生も知らなくて、弁護団で一緒になってメーリングリストでもガンガンと厳しく指導などされ、最初は「こわーい」と思つたのですが（笑）。夜、寝ていても夢に山口先生が出てくるほどでしたよ。ただ、事件の中で、山口先生の人間的な魅力もいっぱい感じましたし、なによりも山口先生から弁護士としてたくさんのことを学びました。

ろくでなし子さんが逮捕された頃、僕はむさぼるようにフェミニズムの本を読んでいました。弁護団を結成してカンパ集めをするときも、僕はフェミニズムを語る人に支援をお願いしました。

ところがカンパしてくれた人から「なんで山口貴士が弁護団にいるの！ それだったらカンパしなかった！」と言われるなどあつて、そのあたりで、両陣営の不穏な？（笑）関係を感じるようになりました。ただ僕は弁護士なんで、弁護士としてろくでなし子さんの無罪獲得のために、あらゆる知恵を出し合つて闘うというのが仕事で、僕の弁護士としての仕事について「この弁護士が弁護団に入っているなら応援しない」とか言われると、この人たちは何を言ってるんだらうと、そんな間に本人が有罪になったらどうするの？ と思ひました。ろくでなし子さんの2回目の逮捕は、北原みのりさんも共犯者として一緒に逮捕されましたが、そのときはさらにフェミニズムを語る人から「南くんは、どっちの味方なの？」とまで言われて、「そういう話じゃないでしょう」と残念な気持ちになりました。

僕はフェミニズムに共感するところは多いですが、日本の女性はいっぱい搾取されていると思うし、性風俗産業の中で女性が無理強いされる場面も現実にあると思います。社会の構造として男女平等の問題として、議論してそして多くの人の共通認識としての理想を実現すべきと思うのですが、勢いいきなり上からポーンと降ってきて「だからダメなんです」と言われても、社会に対する説得にはならないですよ。けっきょく喧嘩にな



るだけだし。「けつきよくは、力づくで独裁者になつて実現するのが理想ですか?」とか揚げ足をとりたくもなりませんよねー。

フェミニズムを語る人の中には、社会の男尊女卑の構造を明解に批判したり、政治権力のマツチヨな横暴を糾弾したり、多くの女性がついつい男性との関係性から萎縮して言えないことを、ハッキリと意見表明する凛々しさを感じていました。ところが、ろくでなし子さんの事件については、そういう姿勢ではなく、自分たちの領域の中の言い訳をしてばかりに見える部分がありました。残念でした。自分たちの言い訳をするために、ろくでなし子さんを批判したり、弁護士を批判し

たり、さらには「ろくでなし子弁護団のせいで私たちも巻き込まれた」と言われたり…。僕はガツカリしましたが、どっちにせよこの事件をきっかけに、フェミニズムを語る人たちから僕は「ダメ弁護士」認定をされたようで、面白いくらい親しい付き合いをしていた人たちから潮を引くようにサーッと疎遠にされました(笑)。

山口先生ははじめ表現の自由の立場の人たちが、アニメとか萌えキャラなどについて、フェミニズムの人たちと激しいやりとりをしていたという歴史を知ったのは、ろくでなし子さんの弁護団に参加してからです。なるほどーと思いました。このかみ合わなさは理屈で言ったら、表現の自由の人たちに軍配が上がると思っただけですね。僕だって、成田空港や関西空港に帰ったときに空港で、萌えキャラの女の子のパネルが「日本によくこそー」のセリフ付きで置かれているとちよつと引く気持ちになることはあります。日本の文化はこれだけじゃないだろう…:ということは素人的に思いますが。でもそれは絵に罪があるわけではないし、描いた人に罪があるわけでもない。ましてや萌えキャラの絵が好きなのに罪があるわけでもない。萌えキャラなどのデザインやコンセプトに訴求力があつて、それが社会をけん引しているという事実を踏まえて、政治的選択や経済的選択をどのように意思決定しているかという話だと思うので

す。その議論をしようとしているのに「萌えキャラは女性に対する性的搾取の反映だから、とにかく反対だ!」と言われると、まったく議論にならないですね。嫌いだと思う感情は否定しませんが、それだけでほかの人の選択権を奪うのは強制と弾圧です。

坂..社会運動として世の中を動かしていかないといけないときに、そのやり方はということですよ。ね。

南..フェミニズムというブラックボックスが「いい絵」と「悪い絵」の判定をするのは検閲です。昔、戦時中とにかくカタカナ語を取り締まったのと変わらないですよー。

最近、amazonプライムとかHuluとか家に入って、いろんなアニメを家で気軽に見られるようになりました。久しぶりにアニメにはまって「俺ガイル(やはり俺の青春ラブコメはまちがっている)」、「中二病でも恋がしたい!」とか「シャーロット」とか、5、6年前に流行っていたアニメを見て。絵に描いたような萌えキャラの子が出てきて、主人公の男の子はモテないけどイケメンで、可愛い妹がいて、うっふんあっはんな年上の女性が出てきて。お約束の設定の中で、作り手の思いがこもったストーリーやメッセージがあつて、どれも見ていて楽しいし、いろんなことを考えて刺激を受けます。お約束の設定があるのって、アニメ

メだけじゃなく吉本新喜劇だって同じで、その記号化されたお約束設定に顔をしかめることはたしかにあります。それは誰にでも好きとか嫌いがあるからです。吉本新喜劇のお約束の一つとして、桑原和男さんが「女装」して乳首出しているのがありますが、僕はなんとなく嫌いで顔をしかめまです。アニメのお約束の設定や萌えキャラに、顔をしかめる感情は否定しませんが、議論をすつ飛ばして否定されると、好きでミニスカートをはいっている女性に「男を誘っているのか!」といきなり怒鳴るオジサンと思考は同じですよね…とか思っているのが見透かされるからフェミニズムを語る人に嫌われるのかなあ。

僕自身が抱いているフェミニズムを語る人に対する葛藤は、今まで言ったことはないんですよ。僕は、フェミニズムの考え方については、感覚的にすごく共感しているから。ところが、そういう思いを共感した次に言われるのは、「じゃあ、アナタは私たちと仲間になるの? ならないの? 仲間になるなら、あの男友達とは付き合わないで」みたいなことだったというのは、残念このうえなく。小学校の女の子グループのボス子ちゃんを思い出すような。フェミニズムを語る人なのにそんな風に見えてしまうところに、現代の日本社会で女性が自由に生きることの息苦しさを実感して、胸は痛むのですが、とはいえそう言う「じゃあ、

アナタは私たちと仲間になるの?」の無間地獄ですよ。つらい!

坂…でも、接していて思うのが被害妄想とか思い込みに近いものがあるような気がしていて。

南…そうかなあ。一概に被害妄想と言えないと僕は思う。女性が女性だという理由で、家事や育児について時間と労力が一方的に搾取され、仕事での自由な選択が狭められという現実があるのは本当で、それ女性であることを理由とした社会構造の不利な側面です。いつてみれば被害です。だから僕は、フェミニズムを語る人に嫌われたとしても、フェミニズムに心を寄せる女性を否定するつもりはないし、いつか仲良くできたらいいですね。

あ、あとあと、あとさあ、今回の事件で僕は大きく成長したんですよ。それまでブログで、こんなことかまんなことか書きまくっていたのだけど、そんな自意識過剰な中二病みたいなブログを全部消すことができたのです。自分から黒歴史を削除できましたよ。中二病と決別なワタシ…

坂…え、なんで消しちゃったんですか。もったいない。

南…弁護士だけとお堅い人と思われたくないとか、同性愛者なんて差別されているんだというウジウジした気持ちとか、そういう過剰な自意識から「ちんこ」「まんこ」をブログで連発していたのだけど、そんなことをしてる年齢でもないな

と。鏡を見れば普通にイケメンの中年弁護士なんだから、そのままの自分でいいじゃないかと、無理して自分を演出する必要はないと気づいたので。僕自身がただの中二病だと気づかせてくれたのは、ろくでなし子さんでした。ろくでなし子さんは、「アコまん」を本当に楽しみながら作っていて、自分が楽しくて作っていることを邪魔されたくないという自分の好きなことに対する純粹さと根性があつて。僕はそんな根性や純粹さから「ちんこ」「まんこ」を連発していたのではなかったの、自分の恥ずかしさを知りました。

坂…そのブログ見たいな(笑)

南…あーそれなら、昔、ゲイ向けのポータルサイトでも匿名でエッセイ小説みたいなを書いていて、それは今でもネット世界の片隅で読めるので、あとで送ります。面白いので(笑)。ところで僕からも聞きたいことがあつて、こういう表現の自由の活動は、フェミニズムの人たちとは戦いなんですか?(過去のAFEEマガジンvol.6の表紙を見ながら)ここにHRNの特集記事とかありますが。

坂…戦いですかね(笑)お互いに自分の意見を言うことは自由ですから、それは言い合えば良いんですけれども、やはり、HRNなんかはそれなりに影響力があるんです。こと、アニメなどのことに関しては、彼らが言っているような社会にはし

たくなないと考えていて、そういった意味で、我々の意見を主張することは彼らの意見を否定することになり、戦いますよね。でも、よくよく言っている事を見ると、半分ぐらいは当たり前のことを言っているんですよ。実在の児童を守りましょうとか。さっきの話ではないですが、表現規制反対の業界で、HRNの言っているこの部分は正しいよねというようなことを言うと、何言ってるんだお前、いつから表現規制派になったんだというような反応はやっぱりありますよ。さっきの、仲間なの、仲間じゃないの議論じゃないですが。でも、正しいと思うことを言っているんですから、仕方がないじゃないですか。そういう、規制反対原理主義みたいになっちゃうところがあるのも似ているのかも知れませんね。

自己実現のための表現の自由

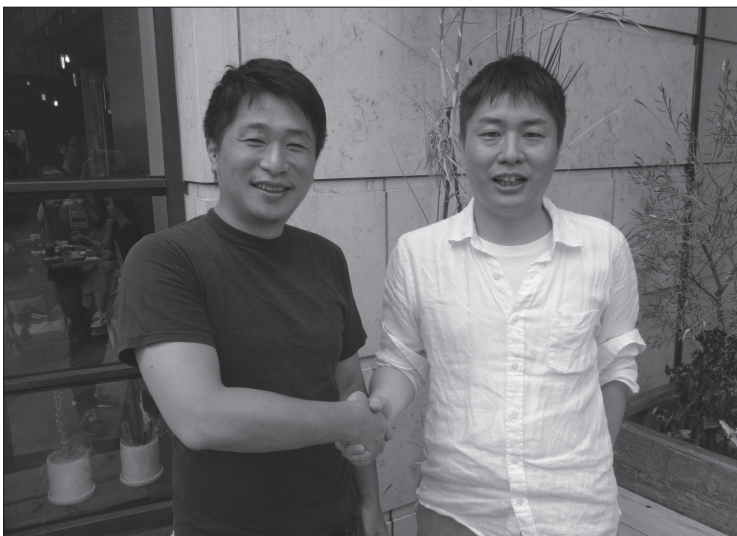
南：一橋のアウティング事件²の時にも「あいづがゲイだ」という表現の自由という権利もないのかみたいに絡まれることがあって。思うのは自由だけど、人を傷つける自由はないんじゃないかなというのが僕の考えです。また、傷つけてしまったことに謝らない人が多いですよ。一橋アウティング事件でも「そんなことでは、傷つくワケない」とか言う人もいるけど、嘘でも仮病でもな

く現実そこに傷ついた人がいるんです。そのきっかけがアウティングされたことになったのなら、裁判云々の前に、「ごめん」とか、「悪かった」とか、「傷つけるつもりはなかった」とか言葉で伝えるべきですよ。でも、謝れないメンタリティ、「ごめんと言ったら人生は負けだ」みたいに考えているが相手にいると、どうしようもなくなってしまうですよ。ちょうど昨日、和解したコナミスポーツの事件³についても、僕が担当なのですが、やっぱりコナミスポーツは最後まで「ごめん」と言えない姿勢でした。表現や発言で人を傷つけたときは「ごめん」と謝ることは大事ですよ。自由を広げるといふことは、衝突を恐れない社会にシフトしていくことだと思っんです。そうであれば衝突が起こったときにちゃんと対処する心構えを持つておかないと。僕は安易に、表現規制とか検閲とか、自由を狭める方向で衝突を封じ込めるのは、社会の裏側にフツフツとフラストレーションを溜めるから良くないと思います。それは、ろくでなし子さんの裁判でもすごく思いました。坂：特にろくでなし子さんの場合は、誰もごめんではないですよ。南：そうそう、表現規制の社会になると、ろくでなし子さんみたいに、表現で誰を傷つけたわけでもないのに、なぜか「悪いこと」にデッチあげられて、罰金払わせられるとかでしょう。表現の自

由による他人の権利との衝突の問題とは全く別のところで、ただ結果として表現の自由が狭められるなんて、おかしいですよ（ここで南さんは福島瑞穂さんの顔真似をしています）。

表現の自由は最後まで確保されないといけない。表現とか宗教とか。それは、その人の心のよりのことです。司法試験の勉強の中では、表現の自由の中でも政治的表現が重要なものとして教わるんです。政治的表現を抑圧すると、権力に対する批判的な表現ができなくなり、民主主義の過程での判断材料が減って、民主主義が機能しなくなる。だから政治的表現の自由は最大限に確保されなければならない、というわかりやすい説明があるのです。このような民主主義のプロセスに関わる表現の自由について「自己統治の価値」なんて言い方もします。





でも、表現の自由って、いつも政治的なプロセスを意識するようなアタマでつかちなモノではないですよ。描いて楽しい歌って嬉しいとか、人の営みの根源的な表現についての表現の自由があります。そういう表現の自由を「自己実現の価値」というのですが、自己実現とはまさに、その人らしさの本質ですよ。地面に絵を描いて楽しいとか、空に向かって歌を歌って嬉しいとか、そんなときに「アタシはそれ、気に入らないから消して

よ」というのは、アンタどんだけエラい人なのかと。その絵や歌が誰かを具体的に傷つけたのなら、「ごめん」ということはまずあった上で、これからは傷つかないようにどうしていったらいいだろうねという話を、するべきかと思えます。「とにかく今後、一切、絵を描くな、歌を歌うな」というのは、その人の生きるよりどころを奪うことにもなりかねないから、許されるのは最後の最後の最後のことだと思えます。少なくとも直感的な好き嫌いで、「男子がエロい絵を描いていてやめさせてください！」というのは、イジメなんじゃ：ちなみに男性同性愛者の僕ですが、かわいい女の子の萌えキャラのイラストを描くの得意ですよ。ZZガンダムのメカデザインなどされたいた明貴美加さんが模型雑誌に連載されていたMS少女（モビルスーツをパーツ分解しパワードスーツのようにして少女に装着させるイラスト）に憧れて、中学生のころ、広告の裏紙に熱心にMS少女を描きまくっていました。まったく性的な対象ではないのですが。性的な対象であるイケメン男性のイラストを描くのは照れくさくて苦手です。坂：まだまだお話しをお伺いしたいと思うのですが、そろそろ、時間で。今日は本当に久しぶりにお会いできて楽しかったです。ありがとうございます。南：ありがとうございます。

—本日は、お忙しいところありがとうございます。—

脚注

「1」ろくでなし子事件：2014年7月、自身の女性器を3Dプリンタ用データにし、2013年10月以降、活動資金を寄付した男性らにデータ送付の形でダウンロードさせたとして警視庁はわいせつ物頒布等の罪等の疑いでろくでなし子を逮捕した。その後、12月にはデコまん3点を女性向けアダルトショップ店内で展示したとして、わいせつ物公然陳列の疑いで北原みのりとともに、警視庁保安課に再逮捕された。ろくでなし子は作品のわいせつ性を否定した。

「2」一橋大学アウトティング事件：2015年4月に一橋大学において同性愛の恋愛感情を告白した相手による暴露（アウトティング）をきっかけとしてゲイの学生が投身自殺を図って転落死したとされる事件。翌2016年に転落死した学生の遺族が相手側の学生と大学の責任を追及して損害賠償を求める民事訴訟を起こして広く報道されるようになった。（Wikipediaより）

「3」コナミスポーツの事件：性同一性障害で女性への性別適合手術を受けた経営者が、京都府内のフィットネスクラブで男性更衣室などの使用を求められ、人格権を侵害されたなどとして、クラブを運営するコナミスポーツクラブに慰謝料などを求めた訴訟を起こし、2017年6月に和解した事件。京都地裁の伊藤由紀子裁判長は「性自認（心の性）を他者から受容されることは人の生存に関わる重要な利益で、尊重されるべきだ」としてコナミ側に改善を求めた。